なお、その演劇活動は、後に佐久病院が展開する文化活動の先駆けとなったが、かつての文学青年若月は、劇団部のために二〇篇を数える脚本を書いている。

●農村医学の確立

一九四六（昭和21）年一〇月、若月は院長に就任し、「地域の中へ」「農民とともに」を合言葉に、農村医療の確立にいっそうの力を注ぐ。

出張診療活動を重ねる中で、「健康手帳」と「健康台帳」による村ぐるみの健康管理の構想が生まれ、一九五九（昭和34）年、八千穂村（現佐久穂町）で実現する。村と病院が一体となったこの全村健康管理事業で、若月が主張する「予防は治療に勝る」ことが実証された。これは長野県全域を健診隊が巡回する「集団健康スクリーニング方式」の健診活動に発展していった。

農村婦人の疲労実態調査で、農作業中の現場を訪れる（1971年）　佐久総合病院提供

また、不潔な環境やきびしい農業労働に起因する寄生虫病や「こうで」（手指の腱鞘炎）、「農夫症」など、農村特有の病気について研究しようと、長野県農村医学研究会を設立した。これが後に、全国組織である日本農村医学会に発展し、医学界に「農村医学」という研究分野が確立された。若月は、この組織の国際的連携にもつとめ、一九六九（昭和44）年に第四回国際農村医学会議を、一九七三（昭和48）年には第一回アジア農村医学会議を佐久病院で開催している。

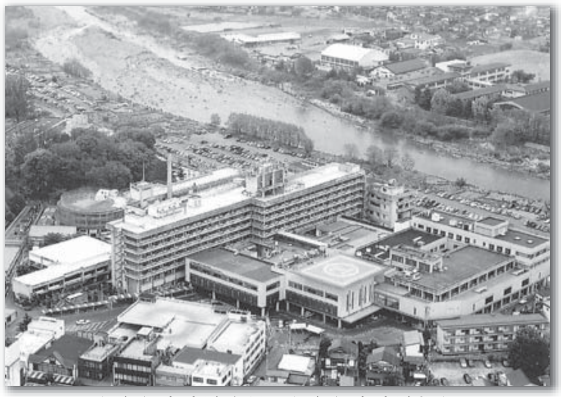
こうした健康管理活動や研究活動をとおして、地域住民のニーズを的確にとらえ、病院本来の機能の向上にもつとめた。伝染病棟や精神神経科病棟の建設をはじめ、診療科の増設、分院の設置など施設を拡充し、この佐久で最高の医療が受けられるようにとの思いから、最新の医療器機や技術も積極的に導入した。

●千床を超える中核病院に

高度経済成長期以後、変貌する農村の中で、農薬中毒など新たな農業災害や、高齢化問題にも早くから目を向けた。全国に先駆けて老人保健施設を開設、老人の在宅医療を中心とする地域ケア活動を展開した。

これらの功績により、アジアのノーベル賞といわれるマグサイサイ賞を一九七六（昭和51）年に受賞するなど、多くの賞を受けた。

設立時二〇床でスタートした佐久病院は、いま千床を超え、第一線医療から高度専門医療までを担う、地域の中核病院に発展した。いっぽう若月は、「病院づくりは、地域づくりと結びついてこそ本当の発展がとげられる時代になった」として、一九九四（平成6）年の第四八回病院祭で「佐久総合病院の将来構想―夢とロマンをもって」の私案を発表している。こうして若月は、つねに「夢とロマン」を追い求めた。



佐久総合病院全景　佐久総合病院提供

二〇〇六（平成18）年八月二二日、若月は、佐久が「農村医療のメッカ」と呼ばれるようになる大きな足跡を残し、九六歳で永眠した。

（内田直人）

・・・・・・・・・・・・・・・

参考文献

若月俊一『村で病気とたたかう』岩波書店

若月俊一『信州の風の色』旬報社

南木佳士『信州に上医あり』岩波書店

「佐久病院史」作製委員会『佐久病院史』勁草書房

肖像写真提供

佐久総合病院

佐久の先人たち⑰

農民とともに 地域に生きた医師

若月俊一（わかつきとしかず）

（1910～2006年）

わずか20床の農協病院に赴任した若月俊一は、地域の人々のために寝食を忘れて診療し、健康管理活動や農村病の研究も進めた。彼の「弱い立場の人たちと生きる」精神は地元の熱意にも支えられ、ベッド千余床、職員1900人の病院に発展させた。若月の名は、農村医療と農村医学の開拓者として、国内だけでなく、海外にも知られる。

●民衆のために生きる決意

若月俊一は一九一〇（明治43）年、東京に生まれる。東京府立第一中学校（現日比谷高校）から旧制松本高校（現信州大学）を経て、一九三一（昭和6）年、東京帝国大学医学部に入学した。

松高時代はプロレタリア文学や哲学書を読みふけり、マルクス主義に心ひかれていく。東大在学中、共産主義運動にかかわり、無期停学処分を受けたが、この間若月の中に培われた「ヴ・ナロード」（人民の中へ）、「民衆のために」の精神が、後に佐久の地で生かされることになる。

一年後に復学を許された若月は、一九三六（昭和11）年に医学部を卒業したが、希望するどこの医局からも入局を断られる。失意の若月を受け入れてくれたのが、東大分院外科の大槻菊男（おおつききくお）教授であった。若月は外科医としての技術と学問を身につけて、民衆の役に立つ医者になろうと決意する。

一九三九（昭和14）年、医局から派遣された石川県の病院で、軍需工場の患者の工場災害に関心を寄せる。翌年、医局に帰った若月は、東京近辺の軍需工場に出向いて「工場災害」の研究に没頭する。その研究結果を専門誌に発表し、一九四三（昭和18）年に、著書「作業災害と救急処置」（東洋書館）を出版したことで、その内容が治安維持法に違反するとして、警視庁に逮捕される。

一年間拘禁され、釈放された若月は、大槻教授の勧めで、佐久病院に外科医長として赴任する。一九四五（昭和20）年三月、太平洋戦争が終戦を迎える半年ほど前のことである。

●佐久に赴任して

佐久病院は、当時の南佐久郡下二三か町村の産業組合（農協の前身）が、「農民のための病院を、自分たちの手で作ろう」と、資金を出し合って、終戦の前年に開設したばかりの病院であった。その設立の趣旨に共鳴した若月は、この佐久で農民の健康を守るために働くことを決意する。

佐久地域には外科医がおらず、外科医としての診療は、たちまち多忙を極めた。あらゆる手術をこなさなければならず、それまで一人もいなかった入院患者も急増した。そんな中で若月は、病院に来る患者に手遅れの病人がたいへん多いことに気付く。

当時の農村では、民間療法などに頼って、病気を手遅れにしてしまう患者が多く、若月はその手遅れを防ごうと、休日を利用して無医地区への出張診療を始める。同時に、正しい病気の知識や衛生思想を普及しようと、診療の後に衛生講話や、自ら脚本を書いて、演劇活動も行なった。病院祭の開催もそのひとつである。

病院祭の若月院長にものを聞く会場では、たくさんの質問に答える（1985年）
佐久総合病院提供